

お嬢様は普通の人生を送ってみたい

目次

お嬢様は普通の人生を送ってみたい

5

番外編 お嬢様を婚約者にしたら……こうなる

279

お嬢様は普通の人生を送ってみたい

ここはオフィスビルが建ち並ぶ街の一角にある、電子部品、音響機器などを製作する電器メーカーの自社ビル。

この春入社したばかりの私——新行内涼歩は、午前の新人研修を終えて席を立とうとしたところ、隣にいた同期の女性に声をかけられた。

「新行内さん、一緒にお昼行かない？」

「あ、はい！ 行きましよう」

声をかけてくれたのは釜屋さんという、私と同じ二十二歳の女性。ここ数日、顔を合わせる度に隣に座り、一緒に研修を受けている。

入社式で隣だった彼女は、私と同じく女子大出身だったこともあつて意気投合。この会社に入つて初めて会話を交わした女性である。

「新行内さん、お昼何にする？ 私は昨日和定食だったから、今日は違うものにしようかな」

「私は昨日パスタだったから、今日はお肉にしようと思います」

「へえ。新行内さん、お肉好きなの？」

「わりと好きです……」

他愛ない会話をしながら、私と釜屋さんは人が続々と吸い込まれていく社員食堂へ移動する。

この会社の社員食堂は、値段がとんでもリーズナブルで、味も美味しい。しかも、社員が首から提げている社員証で購入ができて、料金は給料から自動に引かれる仕組みだ。

今日のランチはAが中華、Bが和食、Cがイタリアン。

トレーを持って列に並び、カウンターでAランチを注文する。すぐに、食堂のスタッフが慣れた手さばきでトレーの上に料理のお皿を置いていってくれた。

ちなみに今日のAランチのメインは、油淋鶏。

「新行内さんの美味しそうですね。私もAにすればよかったかな」

そう言いながら私の手元を覗き込む釜屋さんは、Cのカルボナーラを選んだようだ。

広々とした食堂の中から空いている窓側の席を選び、釜屋さんと向かい合せて座る。背中の真ん中まである長いストレートの髪をシュシュで結ぶと、手を合わせ食事を始めた。

私がスプーンの器に手を伸ばすのと同時に、釜屋さんが口を開く。

「最近、ようやく会社にも研修にも慣れてきた感じがするよ。新行内さんはどう？ 慣れた？」

「そうですね。今のところOJT担当の先輩も優しい方ばかりなので、あまり不安に思うこともなくきているかなって感じです」

すると釜屋さんが、ちらつと周囲を確認してから身を乗り出す。

「この会社、昔は新人研修がすごく厳しかったらしいよ。でも今の時代、あんまり厳しくすると

せつかく入った新社員がすぐ辞めちゃうから、最近は何となく仕事を覚えてもらう方向にシフトチ
ェンジしたらしいって、他の子が話してるの聞いちゃった」

「そ、そうなんですネ……私としては、その方がすごくありがたいですけど……」

「私も……」

小声で教えてくれた釜屋さんと二人で、しみじみと頷く。

「もうすぐ研修も終わりだし、その後どこに配属されるか分かんないんだよね」

姿勢を戻し、フォークでくるくるとパスタを巻きながら、釜屋さんがため息をついた。

「そうですよねえ。でも、どこに配属されても、頑張ることに変わりはないですし」

「違う部署になっても、たまには一緒にランチしようね？」

「はい、ぜひ！」

こんな風に言ってもらえることが素直に嬉しくて、私の顔に笑みが浮かぶ。そのまま鶏肉を口に
運んでもぐもぐ食べていると、私をじーっと眺める釜屋さんの視線に気づく。

「……？ あの、何か……？」

「ううん、なんか……新行内さんで良い子だなあって。言葉遣いとかすごく丁寧じゃない？ 姿勢
もいいし、お箸の遣い方も綺麗だね。きつと親御さんが、ちゃんとした方なんだろうなって」

「……えっ!？」

親の話題を出された瞬間、思わず体が震えた。

「そ、そんなことはないですよ……わりと滅茶苦茶っていうか、一般的ではないといえますか……」

必死に取り繕う私に、釜屋さんが不思議そうな顔で首を傾げた。

「滅茶苦茶……？ でも、あの新行内家の遠縁にあたるんでしょう？ それだけでも、へえ〜!! って
思ったけどね」

釜屋さんがニコツとして、フォークでパスタをくるくる巻く。それを笑顔で見つめながら、私は
背中につつーと嫌な汗が流れるのを感じていた。

「……は、はい……すつごく遠いんですけど……一応……」

新行内家——それは、おそらくこの国で知らない人はいないであろう、超有名な一族の名前だ。

世界的な有名企業を数多く持ち、財界だけでなく、政界にも著名人を何人も輩出している名家で
ある。

そして、何を隠そう私は、その新行内家の現当主、新行内源嗣の一人娘なのである。

——ごめんなさい、釜屋さん。私、遠いところかど真ん中なんです……

目の前でにこにこ微笑む同期に、申し訳ない気持ちでいっぱいになりながら、私はこの会社に
入るまでの経緯を思い返す。

新行内家の一人娘として生まれた私の周囲には、常に人がいるのが当たり前だった。それという
のも、私がまだ小さい頃、家政婦として家に入りしていた女性に誘拐された、という事件が
あったせいだ。

運良く、私を家から連れ出そうとする家政婦に周囲が気づき、誘拐は未然に防ぐことができたも

の、それ以来両親は私のことを必要以上に心配するようになってしまった。

だから私は、小学校から大学に至るまで、とにかくセキュリティのしつかりした、いわゆるお嬢様学校と呼ばれる環境で過ごすことになったのだ。しかも、両親が学校への寄付を上乘せし、セキュリティ面を強化させたという話まであるくらいだ。

おまけに、このネットで検索すればなんでも分かってしまう世の中にありながら、私のことは公にはされていないという徹底ぶり。

家の力を使って情報を操作していると、父から聞いた時は心底驚いたものだ。

そんな生活が当たり前となりつつあった中学生の頃、私の意識が変わる出来事が起こった。それまでずっと仲良くしていたクラスメイトの実家が、倒産してしまったのだ。

私はその子と仲が良かったし、彼女のことが心配でたまらなかった。なのに、クラスメイトの大半は、彼女の実家の事情が分かった途端、態度をガラリと変えたのだ。

——〇〇さん、今度公立の中学校に転校されるらしいわよ。

——そりゃそうよ、〇〇さんのお家には、もうこの学費は払えせんものねえ……

挙げ句の果てには、落ち込む彼女に声をかけようとした私を『声をかけない方がよろしいですわ。今や彼女と涼歩様では、天と地ほど立場が違うのですから』と言って、側に近づかせてもくれなかったのだ。

結局その子は、しばらくして転校してしまった。しかしクラスメイト達は、彼女など最初からいなかったかのように振る舞った。それがショックだった。

その時思ったのだ。

もし、家の事業が失敗したのが私だったら、どうなっていただろう、と。

——絶対ない、なんて言い切れない。

私だって、ある日突然、彼女のような立場に立たされるかもしれないのだ。だとしたら、今みたいに甘やかされ、守られるだけの状況に身を任せていてはダメなのではないか……

そう思った私は、不測の事態に備え、自分にできることを必死に調べ、勉強した。そして、高校在学中に取れる資格をできるだけ取った。

その上で、大学進学の際、このままエスカレーター式に大学部へ行くのではなく、社会勉強を兼ねて外部の大学を受け直したい、と両親に相談した。

だが結果は……あっけなく却下された。

親の金で勉強しているうちは、親の言うことを聞きなさいと言われ、確かにそれも一理あると納得した。でも、私は諦めなかった。

就職先を決める際、私は改めて、両親に新行内とは関係のない会社に応募して就職試験を受けたこと、採用されたら家を出て一人暮らししたいことをお願いした。

私の願いは、もちろん猛反対された。新行内の一人娘が一人で住むなんてとんでもない、と。

でも、もしここで、また親の言う通りに就職したら、私が出て社会勉強をするチャンスは、きつと一生巡ってこないだろう。それどころか、就職してすぐに結婚相手を紹介され、寿退社することになりそうだ。

——そんなの、絶対イヤ!!

だから私は、来る日も来る日も両親を説得し続けた。せめて五年、さもなくば三年だけでいいと、諦めることなく説得した。

やがて、私の熱意が通じたのか、はたまた説得は無理だと諦めたのか……両親はいくつかの条件をつける形で、私の独り立ちを承諾してくれた。

その条件のうち、私にとって一番大きな意味を持つものがこれだ。

【新行内家の一人娘であることがバレたら、速やかに会社へ退職届を提出し家に戻ること】

この条件について、最初軽く捉えていたことは否めない。

ただど社会に出て初めて、「新行内」という名の持つ影響力の大きさを、身をもって理解することになったのだ。

「……新行内さん？ どうかした？」

思わず物思いに沈んでいた私に、釜屋さんが心配そうに声をかけてくる。

「あつ、ううん！ なんでもないです！」

私は笑顔で誤魔化して、再び食事に戻ったのだった。

今日の研修を終えた私が、電車とバスを一時間ほど乗り継いで向かった先は、築二十年になるワイルームマンション。その三階にある六畳一間の小さな部屋が私のお城だ。

「ただいま帰りました」

玄関でパンプスを脱ぎながら、独り言のつもりで言った声に、「お帰りなさいませ」と返事があつてギョツとする。聞き慣れた声と、狭い玄関の端っこにきつちりと揃えられたピカピカの革靴を見て、声の主がすぐに分かった。

「秀一郎」

「はい」

六畳ほどの部屋の中心に置かれた小さなテーブルの前で、きちんと正座しているスーツ姿のグレイヘアの男性は轟木秀一郎。御年七十歳になる彼は、我が新行内家に長年仕えている執事である。多忙な両親に代わり、子供の頃からいつも側にいてくれた秀一郎は、私からすればもはや家族も同然の存在だ。

しかし、いくら家族同然といえども、こうして留守中に部屋に上がり込まれてはたまらない。

「はい、じゃない。また私がない間に勝手に勝手に入って！ せめて連絡してからにしてって、この前言ったじゃない！」

声を荒らげる私に、秀一郎は涼しい顔で「しましたよ」と私の方を向く。

「涼歩様の帰宅時間に合わせて手土産を調達し、向かう直前に電話しましたよ。でもいくら電話を鳴らしても出ていただけなかったたので、仕方なく先に上がらせてもらいました」

「えっ？ 電話？」

秀一郎に言われて慌ててバッグの中のスマホを確認する。すると確かにえげつないくらい着信履歴があつた。

——しまった……スマホ、サイレントに切り替えたままだった……

「ご、ごめん……着信音切ってた」

「だと思いました。まったく……涼歩様らしい」

呆れ顔の秀一郎は、目の前に置かれた湯呑みを手に取り、ずずと啜る。どうやら私を待ちながら、一人でお茶を飲んでいたようだ。

そんな彼を横目で見ながら、手にしていたバッグをクローゼットに入れ、洗面所で手を洗ってうがいをした私は、改めて秀一郎と向かい合う。

「さて。今日もお仕事お疲れ様でした。何か変わったことなどはありませんでしたか？」

秀一郎はちよくちよく訪ねて来ては、近況を聞いてくる。それもこれも、新行内家当主の娘であることがバレしていないか、会社でご迷惑をかけていないかをチェックするためだ。

少しでも怪しいところがあれば家に連れ戻す、という父からの命令らしい。

「……今日も無事に与えられたお仕事をして参りました。他には何もありません。報告は以上です」

「それは結構でした。しかし、この部屋の狭さ、どうにも慣れませんね……。やはり旦那様に相談して、もっと広くてセキュリテイのしっかりしたところに移った方がいいのではないですか？」

周囲をキョロキョロした後、秀一郎が眉をひそめる。

「何言ってるの、一人で住むには十分な広さじゃない！ 私は、このお部屋がとっても気に入ってるの」

独り立ちをすると啖呵を切った以上、親の力を借りるつもりはなかった。

このマンションだって、会社からは少し距離があるけれど、自分の給料で借りられる中では一番いい物件だ。大家さんが女性というのも嬉しいし、リフォームしたてで部屋が綺麗なのも気に入っている。

それにセキュリテイだって、マンションの入口はオートロックで住人以外は入れないようにになっているし、周辺は住宅街で治安も悪くない。

住んで二ヶ月になるが、今のところなんの問題も感じていなかった。

だけど秀一郎は、ここに来る度に、今の私の生活について不満を漏らす。

「それでもですよ。新行内家の一人娘が、このような狭い部屋に護衛もつけず一人暮らしなんて、私は心配で心配で夜も眠れず……」

「やめてよ。大袈裟だから。せつかくもうすぐ研修期間も終わって、晴れて正社員になれるっていうのに」

自分の湯呑みを持ってきて、秀一郎があらかじめ沸かしておいてくれたお湯でお茶を淹れる。そんな私を見て、秀一郎がはあ、とため息をついた。

「正社員ですか……問題なくやれているようで何よりですが、本当に大丈夫なのですか？ 私はそれが気がかりで、涼歩様がお家を出てから胃の調子が……」

胃の辺りを押さえて苦しげな顔をする秀一郎につられ、私もため息をついた。

「そんなに心配しなくて大丈夫よ！ 新行内という名前でも、こつちが堂々とあの新行内とは

関係ないって否定したら、意外とすんなり信じてくれるものよ」

確かに就職活動中や就職してからも、新行内の名を見ると眉をひそめる人は多かった。でも、私がきっぱり否定すると、そうだよね、そんな人がこんなところにいるわけないよね、という空気に変わり、それ以降家のことを聞かれることはなかった。

堂々としていれば、余計な詮索はされない、ということを入社後の二ヶ月でよくよく思い知った。「はあ、そういうものでしょうか……私には分かりかねますがね」

私の言ったことに首を傾げつつ、ため息をついた秀一郎がお茶を啜る。

「啓矢様も心配なさってましたよ。箱入り娘であるあなたが一人暮らしなど、本当に大丈夫なのかって」

「知ってます。定期的に連絡が来ますから」

これには私も、はあくため息をつかさるを得ない。

啓矢というのは私の父方の従兄弟である。父の弟の長男である啓矢は二つ年上で、一人っ子の私とよく一緒に遊んでくれた気のいい相手だ。

その啓矢も、やはり私が出ることになった一人、もうそろそろ諦めてもらいたいの。家を出て二ヶ月になるのだから、もうそろそろ諦めてもらいたい。

「とにかく、私は今、初めて自分の力で頑張っているの。心配なのも分かるけど、この経験は今後の私の人生に必要なことだと思っ……。だから、父と約束した三年は、どうか何も言わず見守っていてほしいの。お願いします！」

そう言っ、私は正座して床に手をつき、深く頭を下げる。すると、目の前の秀一郎が静かに立ち上がった気配がした。

「分かりました。ですが、困ったことが起きたら、すぐに連絡してください。涼歩様に何かあったら、それこそ内輪の問題では済まされませんから。そのところ、よく承知しておいてくださいよ」

真剣な表情で告げられた秀一郎の言葉は、ものすごく重い。それが分かっているからこそ、私は腿ももの上的手をぎゅっと強く握りしめる。

「……はい……分かってます……」

「それなら結構。では、私はお暇いたします。冷蔵庫に涼歩様の大好きなフルーツパラーのケーキが入っておりますよ。本日中午に召し上がってください」

「えっ、ケーキ!? ありがとう、秀一郎!」

「いいえ。今日もお仕事お疲れ様でした。早くお休みになりますように」

そう言っ、秀一郎は静かに部屋を出ていった。

秀一郎がいなくなっすぐ、私はいそいそと冷蔵庫の中をチェックする。そこには、子供の頃からよく行くフルーツパラーの、イチゴをふんだんに使ったショートケーキが入っていた。

——わー、嬉しい……!! 秀一郎、ありがとう……!!

実家を出て以来、たまに会えばお小言ばかりの秀一郎だけど、毎回こうやって私の好きなものを買ってきてくれる。

一緒にいる時はなかなか気づけなかったけど、一人暮らしをするようになってから、秀一郎のそんな優しさがダイレクトに身に沁みだ。

私が一人暮らしをすることで、秀一郎や両親、従兄弟の啓矢にすごく心配をかけている。わがままを通しての自覚がある分、今まで以上に気を引き締めなければ。

——うん、頑張ろう。

私は大好きなケーキを見つめ、決意を新たにしたらのだった。

二

晴れて研修期間を終えた私達、新入社員は、各部署に配属されることになった。

私の配属先は営業部で、釜屋さんはマーケティング部。一緒でないのが少し残念だけど、お互い違う部署で頑張ろう、と励まし合った。

そうして迎えた配属初日。緊張しながら事前に伺っていた担当者の元へ行くと、早速部署の社員に挨拶をする流れになった。

「今日から営業部に配属になった新行内さんです」

「新行内涼歩です。よろしくお願いたします」

そう言っ頭を下げると、部署の皆さんが拍手で迎えてくれて、少しだけ緊張が和らいだ。そん

な中、微かに「新行内って……」という声が聞こえたような気がしたが、私は笑顔でスルーした。

新行内家のお嬢様ではない私個人を評価してもらえる機会は、きつと今しかない。だからこそ、

私はこの限られた時間の中で、できることを精一杯やりたいのだ。そのためにも、細かいことをいちいち気にしている時間はない。

——名前を呼ばれる度にビクビクしてたら、かえって怪しまれるだけなもの。

私をみんなに紹介してくれた部長が、誰かを探すように辺りを見回す。

「じゃあ、君に付いてもらう社員だけど……秋川」

名前を呼ばれ、すぐに「はい」と返事をした男性が私に近づいてきた……のだが、その容姿に思いがけず目が釘付けになる。

清潔感のある短めの黒髪に整った顔立ち。細身で長身の彼は、まごうことなき美形と呼ばれる類の男性だ。

「営業主任の秋川です。どうぞよろしく。これから新行内さんには、俺の補佐に付いて営業部の仕事を覚えてもらいます」

秋川と呼ばれた男性は、私と視線を合わせて、にこりと微笑んだ。

これまで身近に接してこなかった美形男性の笑顔に面食らいつつ、私は深々と頭を下げた。

「は、はい。よろしくお願いたします」

「じゃ、席に案内するから、こっちに来てください」

「はい」

スタスタと歩いていく秋川主任の後を、私は周囲の人達に頭を下げながらついていった。

「新行内さんの席はここね」

秋川主任が示したデスクに、私は持っていた荷物を置き、ゆっくりと椅子に腰を下ろす。

——わあ、これが私のデスク……すごく嬉しい……

正社員になった喜びに打ち震えていると、私の隣の席に秋川主任が座った。

「俺の席は隣なんで、何かあれば遠慮なく声をかけてください」

「はい。お世話になります」

まだ緊張でどこもない返事をした私に、秋川主任はフツ、と笑みを漏らす。

「初々しいな」

そう言つて微笑む秋川主任の笑顔がものすごく爽やかで、私の胸がドキッと小さく跳ねた。

——なんて綺麗なお顔……これがかつと、イケメンという男性なのだけ……

なんせ幼稚園からずっと女子校育ちで、家族以外の男性にほとんど免疫のない私。

経験のない、ある意味事件ともいえるこの状況に、私は秋川主任の顔を見つめたまま硬直する。

そんな私に気づいた秋川主任が、表情を曇らせた。

「……どうした？ 大丈夫？」

「あつ！ はい。大丈夫です!!」

声をかけられて、慌てて秋川主任から視線を逸らした。そんな私に、主任が「それならいいけど」と言いながら、再び微笑む。

「部署の雰囲気とか、仕事に慣れるまでは大変だと思うけど、最初は誰でも戸惑うし、失敗もするものだから。困ったら一人で悩まず、必ず相談してください。もちろん俺じゃなくても、部署の先輩社員なら誰に声をかけてくれても大丈夫です」

とても優しい声音と、爽やかな笑顔に、ついぼーっとなりかけて、慌てて気を引き締めた。

「……はいっ。分かりました。お気遣いありがとうございます」

「うん。じゃあ、まずは新行内さんがやることを、順を追って説明していきます」

「はい、よろしくお願います」

私のデスクに椅子を近づけ、パソコンを立ち上げた秋川主任が、ゆっくりと仕事内容について説明してくれた。

分からないことに関してその都度質問をすると、秋川主任は変わらぬ優しいトーンで、私がちやんと理解するまで根気よく説明してくれる。

一通りの説明を終え、ある程度のノルマを私に課すと、彼は会議があるといつて席を立った。

説明をしてきている間、なんとしても一回で理解しなければいつも以上に集中していた結果、

秋川主任の姿が見えなくなった途端、私の体から力が抜けた。

——ふう、緊張した……あんなイケメンさんの補佐っていうのも善し悪しだわ……でも、教えてもらったことが無駄にならないよう、頑張らなくては。

気持ち新たに深呼吸した私は、与えられたノルマをこなすために、パソコンのモニターに向かったのだった。

営業部に配属になり、一週間が過ぎた。

私の仕事は、秋川主任の補佐をする営業事務だ。彼が受注を決めるごとに契約書を作成したり、発注書を作成し発注の手続きを行ったり、お客様に送る請求書を作成するのが主な業務になる。

まだ書類を作成する度に秋川主任の確認が必要だけど、なんとなく仕事の流れが掴めてきたような気がする。

と同時に、だんだんとこの部署内のことが見えてきた。

営業部の男女の比率はほぼ半々で、年齢は様々。営業担当の社員には基本補佐の事務員が付くのだが、秋川主任はこれまでほとんど補佐を必要としなかったのだとか。

現在三十一歳の秋川主任は、年齢的には中堅の営業担当社員だが、二十代で主任に昇格するともめき頭角を現し、月間の売上高トップを一年近くキープし社長賞を数回もらうほど優秀な人なのだ、近くの席に座る女性社員が教えてくれた。

それに加え、長身でスタイルも良く、整った顔立ちから女性人気も高いのよ、と耳打ちされる。それに関しては、言われる前から私もなんとなく気づいていた。

毎日色合いの違うスーツを身に纏まとっている秋川主任は、腰の位置も高いし、おしりも小さくキュッと上がっていて本当にスタイルがいい。

私も実家にいる時は、秀一郎をはじめスーツを着た男性といつも接してきたけれど、秋川主任ほどスーツが似合う男性をこれまでに見たことがない。

それどころか、スーツ姿の男性に見惚れたのは、秋川主任が初めてだった。

そんな秋川主任は女性人気だけに留まらず、男性社員からの人望も厚いらしい。

私が秋川主任に指導を受けている時、声をかけてくる男性社員達は揃揃って『秋川は教え方が上手いから、こいつについていけば間違いない』と太鼓判たこばんを押していた。

しかし中には、『こいつ、とにかく女性に人気あるから、新行内さんやつかまれないように気をつけてね?』と、冗談めかして忠告され、返答に困ってしまうことも。

そんな時は、大抵横から秋川主任が会話を割り込み、『嘘だから。気にしないように』と、フォローしてくれた。

——でも、嘘ではないと思う。秋川主任、モテそうなもの。

そう内心で思っていた、ある日の昼。

同期の釜屋さんと、久しぶりにランチをご一緒することになった。

私と釜屋さんは、社員食堂のテーブルに向かい合わせに座り、お互い本日のAランチであるエビチリ定食を前に手を合わせる。

「それにしても、新行内さんが秋川主任の補佐になるなんて、びっくりした」

話し始めてすぐに彼女の口からその話題が出たことに驚き、つい箸はしを止めてしまった。

「あの。その情報をどこで聞いたのですか……?」

思わず尋ねると、釜屋さんがごくん、とご飯を呑み込んで教えてくれた。

「秋川主任って、社内ですごく人気あるみたいだね、私の部署の女性社員が噂話してたんだ。秋川

さんに、新入社員の女の子が補佐に付いたらしい……て」

「そ、そうなんですか……やっぱり秋川主任の人気はすごいんですね。実は私も、何回か女性社員が秋川主任の噂話をしている場面に遭遇しました」

ある時、休憩時間に無料で飲めるコーヒーを淹れに行ったら、そこに集まっていた別部署の女性社員が秋川主任のことを話していた。また、社員食堂で食事をしている時も、度々女性社員の会話に秋川主任の名前が出てくるのを耳にした。

そうしたことから、彼がこの会社でかなり有名人であることがよく分かった。

「で、新行内さん。そんな有名人の下で働いている率直な感想は？ 実際の秋川さんって、どんな感じ？」

食べる手を止め、釜屋さんが目をキラキラさせながら私に尋ねてくる。

どんな感じと聞かれて、ぼんやりと秋川主任を思い浮かべた。

「……実際の、ですか……？ そうですね……すごく優しく丁寧に指導してくださるので、秋川主任の補佐に付けてよかったなって思います」

頭の中に秋川主任の顔を思い浮かべた私は、これまでのことを思い出し、はあくと深いため息をついた。

秋川主任に付いて仕事を教わっている私も、四六時中一緒にいるわけではない。というのも、人一倍お忙しい秋川主任は、ちよくちよく外出したり、会議で席を外すことが多いからだ。

なので主任が不在の間、私は教わったことをふまえて一人で黙々と作業をしているのだが……

やはりというか案の定というか、この一週間、何度も失敗をして秋川主任の手を煩わづらわせてしまっていた。

昨日も、打ち込んだばかりのデータの保存を忘れてしまい、あまりの申し訳なさに地中深く埋まりたくなってしまった。

『本当に、申し訳ありませんでした……!!』

——私のバカ……!! どんくさいにもほどがある……!!

私が頭を下げ小さくなっていくと、『ちょっといい?』と言って、主任が私のパソコンの前に座って何やら作業を始める。しばらくすると、モニターに消えたはずのデータが表示されていた。

『はい、これで元通り』

『え、あれ……?』

パソコンに疎まい私は知らなかったのだが、どうやら自動保存機能があったらしく、消えたと思ったデータは消えていなかったのだそうだ。

『よ、よかった……消えていなくて!! ありがとうございます』

胸に手を当て安堵しながら、主任にお礼を言うのと、何故か『ごめんな』と謝られた。

『いや、自動保存のこと言っただけでなかった俺が悪かった。ごめんな、無駄に落ち込ませて』

どう考えても保存を忘れた私の方が悪いのに、こんな風に言ってくれるなんて。

——秋川さんって、なんていい人なんだろう……

秋川主任に感謝しつつ、忙しい彼の手を煩わづらわせてしまったことに改めて落ち込んでしまった。

そのことを思い出し、またため息を零す。

「へえ……そうなんだ。格好いいのに優しいなんて、そりゃ女性から人気出るわよね」

再び箸を動かした釜屋さんに、私は激しく同意する。

「そうですね……世の中には、こんな素晴らしい男性がいらっしゃるのだと、衝撃を受けました」

「衝撃って……あ、そっか。新行内さん、女子校だったから、あんまり男性と接してこなかったのか。もしかして、男性が苦手だったりする？」

「ぼくぼくエビチリのエビを口に運ぶ釜屋さんに尋ねられ、私は考える。」

「苦手ではないのですが、これまで家族以外の男性とほとんど接することがなかったので。それに、お付き合いなどもしたことがないですし、なんとも……」

正直に話したら、釜屋さんが箸でつまんだばかりのエビをぼろりと落とした。

「……えっ、ないの？ 一回も？」

「はい」

「そ、そっか……それは確かに衝撃を受けるかもね……でも、秋川主任みたいな人、そうそういな
いから、ある意味、新行内さんはラッキーだったね」

「ラッキー、ですか」

「うん。あ、そうだ。そういえばね……」

すぐに釜屋さんから別の話題が振られる。だけど私の頭の中には、彼女の言った「ラッキー」という言葉が何故か消えずに残った。

——そっか、ラッキーなのか……

なんだかよく分からないけど、そう言われたら嬉しい。

思いがけず気分が上がったまま、釜屋さんとの楽しいランチタイムは続いたのだった。

ランチを終えた私が部署に戻ると、秋川主任から新製品の展示会について説明される。

「毎年、うちみたいなメーカーが、こぞって新製品を出品する展示会があるんだよ。今年は来週に
社外の展示場でやるんだけど、できれば新行内さんにも手伝ってもらいたいんだ」

私は、秋川主任に渡された、概要の書かれたプリントに視線を落とす。我が社が開発・製造・販
売している電子部品や、カーナビやスピーカー、それに近年本格的に参入したロボット掃除機など
の新製品を展示し、従来の顧客以外にも広く商品をアピールする場となっているのだそうだ。

こういう場に行くことも勉強のうち。もちろん私に断るといふ選択肢はない。

「はい。分かりました」

「展示会の期間は来週の水曜日から土曜までだけど、そのうちの二日間、手伝いをお願いできる？
普通に会社に来てくれれば、俺と一緒に会場に行くから」

「はい」

素直にこくりと頷くと、秋川主任は小さく頷き返して席を立った。それを見届けた私は、再びプ
リントに視線を落とす。そこで、裏面に参加企業の一覧が載っていることに気づいた。

——どんな企業が参加するんだろう。

何気なくその一覧に目を通していた私は、ある企業の名を目にした瞬間、小さく呻き声を上げてしまった。

「S G C 電機株式会社」——私の実家、新行内家が経営する会社の一つである。私が就職した会社は、実家の関連企業とは業種が違うので、すっかり気を抜いていたけれど、まさかこんな形で関わることになるとは。

——ど、どうしよ……これはマズいかもしれない……

うちが経営する会社の重役は、新行内の親族が多く、私とも顔を合わせる機会が多い。なので、世間一般には公にされていない私の顔も、もちろん知られている。

展示会で万が一、知り合いに遭遇することになったら……

私は、大企業の重役が、新入社員の人に声をかけてくる場面を想像して青くなる。そんなことになったら、周りにいる人は絶対私の素性を怪しむ。

——急いで何か対策を立てなければ！

展示会に行くまでの数日間、私はどうやって身バレを防ぐか、そのことばかり考えていた。

そして展示会当日。

出勤してきた私の姿を見て、秋川主任が「あれ？」と声を上げた。

「今日の新行内さん、いつもと雰囲気が違うね。髪型や服装もだけど、眼鏡してるからかな？」

「そ、そうですか？ 今日、上手くコンタクトが入らなかったの……」

笑顔でなんでもないふりをする、秋川主任はそれ以上聞いてこなかったのほっとする。

今日の私は、黒縁の眼鏡をかけ、いつも下ろしている長い髪を後頭部でお団子にしていた。服装も、普段スカートやキュロットが多いけど、かつちりとしたパンツスーツだ。

昨夜、秀一郎にもビデオ通話で確認してもらい、一見すると私とは分からない、とお墨付きをもらっていた。

心の中でよし、と拳を握りしめつつ、秋川主任がハンドルを握る車に乗り込んだ。そうして私は、もう一人の担当者と共に展示会が行われる会場に移動した。

会場となるのは、湾岸エリアにある大きなイベント会場で、こうした場所に來るのが初めての私は、目的を忘れて建物に見入ってしまった。

——ここがイベント会場……大きい……

展示する製品は事前に運び込まれているので、私達は直接ブースに移動し、来客の対応をするのが仕事だ。

関係者に配られた会場のマップで、ブースの位置を確認する。私が一番近づきたくない「S G C 電機」のブースとは、位置が離れていたのとおりあえず安心した。

でも、いつどこで誰と遭遇するか分からない以上、気は抜けない。

ブース内の製品やパンフレット、それにブースに来てくださった方に差し上げる販促品を確認しながら、周囲を窺っていると、秋川主任が顔を覗き込んできた。

「新行内さん、大丈夫？ なんか元気がいけど」

主任に声をかけられて、ハッ、とする。

——いけない。今は仕事に集中しなくては……!!

忙しい秋川主任に、余計な心配をかけてはいけないと思い、気を引き締め直す。

「いえ、大丈夫です……それに私、体は丈夫なので……」

笑顔で返事をしたものの、動揺しているせいか会話がかみ合っていないことに気づき、「すみません、本当になんでもないんです」と謝った。

私の返答に不思議そうな顔をしていた秋川主任は、何かを思い出したように持参したバッグを漁ると、ミネラルウォーターのペットボトルを渡してくれた。

「よかったら飲んで。初めてだし、最初は緊張すると思うけど、時間が経てば慣れるから。それと、もし途中で具合が悪くなったら、遠慮なく言うこと。いいね?」

「は、はい! ありがとうございます」

買ってからまだそんなに時間が経っていないのか、冷たいペットボトルを握りしめた私の胸が、小さく疼く。それは、これまで感じたことのない、痛みのような不思議な感覚で。

——ん? 何、この感覚……もしかして私、本当に具合悪いのかしら……

困惑しながら陰に隠れてお水をいただき、再びブースに戻る。そこではすでに、我が社の製品に興味を持った人が続々と足を止め始めていた。

事前の打ち合わせ通り、私が足を止めてくれたお客様一人一人に販促品を渡し、興味を持ってくれた方に秋川主任が製品の説明をしていく。

「どうぞ、ゆっくりご覧になってください。こちらは、今年発売する新製品です。これまでの製

品より、だいぶ性能が上がっています。例えばこちらの機能ですが……」

流れるような主任の説明に耳を傾けられた方々は、興味深そうに聞き入り必ずパンフレットを持って帰っていく。

お客様の姿が見えなくなると、秋川主任が短く息を吐いた。

「……と。まあ、こんな感じですよ。中には細かく機能とか聞いてくる人もいますので、そういう場合は、無理せず俺に振ってくれていいから」

「はい。分かりました」

ちよつとだけ緊張がほぐれた私の目に、秋川主任の社員証が映る。

——秋川……虹……K O U A K I K A W A……秋川主任って、こう、っていうんだ。

いつも書類に名前が書いてあっても読み方が分からなかったのだが、社員証を見てようやく判明した。素直にいい名前だと思った。すごくお似合いだ。

「秋川主任って、虹って書いてこう、っていうお名前なのですね。素敵ですよ」

まさか、そんなことを言われるとは思っていなかったのだろう。秋川主任が口を開けて、ぽかんとしている。

「……え? 名前?」

「その、社員証を拝見しまして……恥ずかしながら、今の今まで、なんて読むのかなって思っていました」

「……今? 一週間以上隣で仕事してたのに?」

「はい、なので、恥ずかしながら、と……」
私と秋川主任の間に、数秒の間が空いた。

「新行内さんって、天然って言われたことない？」

「は、天然……ですか？ あ、マグロとかウナギの……」

「うん、ごめん。俺が言ったことは忘れてくれ」

秋川主任はパツと口元に手をやると、私に背を向けてしまった。

「……え？ それはどういう意味……」

さっぱり状況が理解できないしていると、またブースに足を止める方が数人いらしたので、私達は急いでその方達の対応に回った。

忙しくやって来る人達の対応をしているうちに、あつと言う間に昼時になる。各企業の参加者は、あらかじめ控え室が用意されており、そこで各自昼食を取るようになっていた。

「あー、もうこんな時間だな。新行内さん、先に食事してきていいよ」

「はい。じゃあお先にいただきます」

秋川主任がそう言ってくれたので、私はその厚意に甘えさせてもらおう。

展示場のすぐ近くにコンビニやカフェがあるので、そこで昼食を調達する人がほとんどらしい。事前にそれを聞いていた私は、コンビニでサンドイッチを買って控え室で食べることにした。

主任はゆっくりしておいで、と言ってくれたけど、さすがに先輩方が何も食べずブースで待機しているのに、自分だけのんびり食事なんてできない。

できるだけ早く食事を済ませた私は、急いでブースに戻った。

——お昼時だからか、さつきより人が少ないかな……

キョロキョロしながら、食事の間外していた眼鏡を持ってブースに向かっていると、正面から歩いてきたスーツ姿の年配男性とすれ違う。その男性が私の横を通り過ぎる瞬間「あれっ!？」と声を上げた。

「涼歩ちゃんじゃないかい？」

いきなり名前を呼ばれたことに驚き、勢いよくその男性を見上げる。

グレイヘアを綺麗に整え、上質な明るいグレイのスーツを身につけた男性の顔には見覚えがあった。

「す……須藤のおじさま……!!」

「やあ、久しぶりだな。何年ぶりかな。すっかり大人になって。元気にしてたかい」

私を見つめるおじさまは、目尻を下げ優しげに微笑んでいる。

須藤のおじさまは、須藤産業という重機を製造販売するメーカーの社長さんだ。父とは高校時代からの友人で、年に何回かお互いの家を行き来するほど仲が良く、私も子供の頃から知っている。

久しぶりに会ったおじさまに、ついつい私も気が緩んで笑顔になった。

「はい、元気です!! おじさまもお元気そうで」

「はは。いつの間にか、こんなに年食っちゃったけどね。お陰様で元気だよ。……で、涼歩ちゃん。今日はこんなところで何をしてるんだい？」

この質問に、懐かしい気持ちが一転。頭の中に「絶体絶命」という言葉が浮かんだ。
「いや、えっと……それがですね……ちよつと事情がありまして……」

なんとかしてこの場を切り抜けなければと、必死に頭を働かせる。しかし、おじさまは眉根を寄せながら、私の胸元に提がった社員証に視線を向けた。

「……社員証？ あれ、もしかして涼歩ちゃん、そこに就……」

「おじさま、ちよ、ちよつとこちらへ!!」

「え？」

私は咄嗟におじさまの腕を掴み、ブースとブースの境目にある隙間に連れ込んだ。私の突然の行動に、おじさまは目を丸くして驚いているようだった。

おじさまと一緒にいた部下らしい二人の男性が、ぼかんとしたまま、通路に立ち尽くしている。

「す、すみません、おじさま。でも、これには事情があるんです……!!」

「はて、事情……?」

興味深そうに眉を動かしたおじさまに、私が今の会社に就職することになった経緯を説明した。すると、それまで神妙に話を聞いていたおじさまの顔に、だんだんと笑みが浮かんでくる。

「ははーん、なるほどねえ……。しかし新行内家のご令嬢が一人暮らしだなんて、なんと面白い切ったことを……あの源嗣さんがよく許したね。涼歩ちゃんを溺愛しまくってるのに……」

「だからです。このご時世、何があるか分かりませんし、いつまでも家に守られているようではないかと思う。だからおじさま、私が今の会社で働いていることは誰にも言わないでいただけま

すか？ 周囲に私の正体がバレたら、父との約束で実家に戻らなくてはいけないので……」

必死に訴えると、おじさまは少し考えた後、静かに頷いてくれた。

「いいでしょう。でもね、涼歩ちゃん。君が新行内家の一人娘という事実が変わらないんだ。だから君は、これまで以上に周囲に気を配ったほうがいい。君の正体を知った途端、周りの目が百八十度変わるからね……そのことを、忘れちゃいけないよ?」

声は優しいけど、目が笑っていない。本気で私のことを心配してくれていると分かるからこそ、私は神妙にならざるを得なかった。

「……はい、分かっています……」

「よし。じゃあ、頑張つて! 何か困ったことがあれば、私でよければいつでも相談に乗るからね」

「おじさま……ありがとうございます」

「うん、じゃ」

最後になつこり微笑んで、須藤のおじさまは部下達と一緒に会場の奥へ歩いていった。

それを見送った私は、一度ため息をつき、気持ちを入れ替えて自分のブースに戻る。

「秋川主任、お先にお昼ありがとうございます」

来客が一旦落ち着いたブースで、水を飲んでいた秋川主任に声をかける。

「お帰り。今さ、どっかの企業の重役っぽい人と話してなかった? もしかして知り合い?」

——ええっ!! まさか秋川主任に見られてた!?

内心ものすごく動揺しつつも、それを悟られないよう必死に平静を装った。

「あつ……の、そう、トイレの場所を聞かれまして……」

「そうなんだ。確かにこうやってブースが並んでると、トイレの場所が分かりにくいもんな」とりあえず不審がられていないので、誤魔化しは成功した模様。

「それよりも、主任。お食事に行ってください」

「いや、俺は別に食べなくても大丈夫だ。水飲んだし」

冗談なのか本気なのか、そんなことを言う秋川主任に、私はちよつと困惑した。

「いえ、ちゃんと食べないとだめですよ。他の先輩方もいらつしやるので私は大丈夫ですから」

そう訴えると、主任がははっ、と笑い声を漏らす。

「そうか。気を遣ってもらって申し訳ないね。じゃあ、お言葉に甘えて、ちよつとだけ抜けるわ」

秋川主任はそう言うのと、もう一人の営業担当者である駒田さんという男性社員に声をかけ、ブースから出ていった。

その後ろ姿を見送っていると、駒田さんが私の近くに寄ってくる。

「あの人、ほつとくと本当に何も食べないまま、夕方までぶつ通しでブースにいたりするからね。」

新行内さんが食事に行かせてくれてよかったよ」

苦笑いする駒田さんの言葉に、私は目を見開いた。

「えっ……さっきのアレ、冗談じゃなかったんですか……!!」

「うん。今日はわりと人が少ないから、休憩する余裕があるけど、忙しい日はマジで食事する余裕

なんかないからさ。しかも秋川さん、あのビジュアルで目立つだろ？ そのせいか、ひつきりなしに声かけられて、夕方まで休みなしなんてことがよくあるんだよ」

「えええ……!! そ、そうだったんですね……」

でも、秋川主任は外見だけじゃなく、製品に関する説明もすごく分かりやすい。それに、声もよく通るから、頭にスツと入ってくる。だからみんな、彼に声をかけるのかもしれない。

そんなことを思っていると、ブースに数人来客があった。商品の説明は駒田さんに任せて、私は彼の隣でその補佐に回る。

「ねえ」

その時、私の左横から声をかけられた。「はい」と返事をしてそちらを向くと、スーツ姿の若い男性が立っている。首から提げられた社員証の企業名には見覚えがあった。展示会に参加している他の企業の社員らしい。

「おたくの製品、俺、長いこと使ってますよ」

「ありがとうございます！」

「で、この新製品、俺が使ってるヤツの後継になるみたいだけど、具体的にどういところが違うの？」

「あ、はい。それでは、細かな説明は営業担当の駒田が……」

専門的な話は私ではなく、駒田さんの担当。しかし話を振ろうとした駒田さんは、現在別のお客様の対応中だった。

では、別のスタッフ……と周囲を見回すが、それぞれのお客様の対応に付いている。要するに、今フリーなのは私しかない。

——どうしよう。私じゃ、上手く説明できない……!!

咄嗟の対応に困っていると、その若い男性は私を見てクス、と笑う。

「自社製品のこと、よく知らないんだ？ まあ、若い女の子じゃあ仕方ないか……しかし君、可愛いね」

「……え？」

製品の話から、何故か違う話になったことに、私はますます混乱した。

その間に、男性は身を乗り出してまじまじと私の顔を覗き込んだ後、社員証に視線を落とす。

「新行内涼歩ちゃんっていうの？ へえ、あの新行内と同じ名字なんだ。まさか関係者だったりとかする……？」

私の顔を窺ってくる男性に、思わずぶんぶんと首を横に振って否定した。

「いいえ!! 違います。まったく関係ありません」

「ふーん、そうなんだ。じゃあ、せっかくだし名刺交換しようよ。俺のあげるから、君のもくれる？」

「あの、その……私は営業担当ではないので……」

男性が名刺を差し出そうとした時、私と男性の間にすっと人が立ち塞がった。

「ありがとうございます。では、私」

——あれっ。

私の前に立ち塞がったのは、秋川主任だった。

主任は男性から名刺を受け取ると、素早く自分の名刺を取り出し、男性に手渡した。

「製品に関する説明は、私がさせていただきます。ご質問がありましたら、どうぞ遠慮なく仰ってください」

につこりと微笑む秋川主任の、できる男のオーラにビビったのか、今までぐいぐい来ていた男性の腰が引ける。

「あ、ああ……じゃあ、パンフレットだけいただいでいきます……」

秋川主任に怯んだ男性は、製品のパンフレットを持っていつてしまった。その後ろ姿を見送りながら、私はほっと胸を撫で下ろした。

それにしても、助けてくれたことはありがたいが、さすがに戻って来るのが早すぎる。

私はいまだ男性の姿を見送っている秋川主任に、こそっと声をかけた。

「秋川主任、戻って来るのが早いですよ!! ちゃんとお食事されたんですか？」

「ちゃんと食べたよ。来る途中コンビニで買ってきたおにぎりを二個。元々俺、早食いだし」

「は、早食いにもほどがありますよ」

面食らった私の顔が可笑しい、と言つて、秋川主任が笑う。

「さっきの男性は、うちの製品より新行内さんに興味があるように見えたけどね。ああいう人には、気をつけて。新行内さん、意外と隙がありそうだから」

「隙……ですか？ 自分ではそんなつもりはないのですが……」

「だろうな。まあ、今みたいなことがあったら、休憩中でも構わず俺のこと呼んで。いいね？」

「は、はい。分かりました」

「よし」

そう言つて微笑む秋川主任に、何故か胸の辺りがキュツとして、苦しいようななんとも言えない不思議な感覚に陥つた。

——あれ……？ 今の、何……？

これまでの人生で味わつたことのない不思議な感覚に、私は一瞬混乱する。でも今は仕事なので、そんなことを考えている場合ではない。

私は気持ちを切り替えて、ブースにいらした方の対応に集中する。

そうして数時間後。これといったトラブルもなく、無事に展示会の終了時間を迎えた私と秋川主任、それと駒田さんの三人は、ブースの片付けをして会場を後にした。

車で会社に向かう途中、後部座席の駒田さんが別件で車を降りる。すると、自動的に車内は運転している秋川主任と助手席に座る私の二人だけになってしまう。

その途端、これまでなんともなかった私の心臓が、急にどきどきと大きく音を立て始める。

——あれ。なんだろうこれ。急に緊張してきた……

それもそのはずで、私はこれまで、移動の際はいつも後部座席に座っていたのだ。

こんな風に、若い男性が運転する車の助手席に座つたことなど、生まれてこのかた一度もない。

何より、私がお世話になつていた運転手は、常に女性だったし。

——よく考えたら、こういうシチュエーションは初めて……

意識した途端、尚更緊張した。

どつきんどつきんから、ばつくんばつくんしてきた心臓の音を秋川主任に聞かれたら、絶対に変に思われる。

明らかに様子のおかしい私に、秋川主任がちらりと視線をよこしてきた。

「大丈夫？ なんか顔が強張つてるけど……」

運転しながら、秋川主任が心配そうに声をかけてくる。

「はっ!? い、いえ、なんでもありません!! 大丈夫です」

「そう？ 今日初めてのことばかりで疲れただろ？ 新行内さんは、会社に戻らないでこのまま直帰でいいよ。家の近くまで送るから」

「え!? いいんですか？ でも私のマンション、ちょっと遠いですよ」

「いいよ。これ俺の車だし。家の場所はどちら辺？」

てつきり会社の車だと思ひ込んでいたのは、秋川主任の車だったらしい。

——そう、だったんだ、これ主任の……

これ、今の私にはある意味知らない情報だった。だって、秋川主任の車だって分かつた瞬間、ますます緊張してしまふ。

「……やっぱり新行内さん疲れてるんじゃない？ 早く帰つてゆっくり休んだ方がいい」

「はっ!! いえ、大丈夫です。えっと私の家は……」

私は拙い地理の知識で懸命に説明をする。でも、上手く伝えられた気がまったくしない。

しかし秋川主任は下手くそな私の説明でも、場所が理解できたらしい。前を向いた涼しい顔が、何度か頷いている。

「ああ、あの辺ね。分かった」

「自分で言うのもなんですが、あの説明でよく分かりましたね……」

「そりゃあ、営業やつてりゃ自然と地理には詳しくなるよ。でも、新行内さん、結構遠くから通ってるんだな」

「はい……」

そう言いながら、秋川主任は私のマンションまで、途中高速道路を利用したりして、思っていたよりずっと早く送り届けてくれる。それには、心の底からすごいと思った。

「主任、すごいです。私、もっと時間がかかると思っていました。主任の頭の中には、高性能のナビが入ってるみたいですね」

「そう? どうもありがとう。ナビも一応付いてはいるけどね」

確かに車にはナビも付いている。でも秋川主任はそれを使わないまま、私のマンションのすぐ近くまで来てしまった。

「で、新行内さんのマンションはどこ……」

もう充分マンションに近いところまで来ているのに、秋川主任はマンションまで送ってくれよう

としている。私としては、ここまで送ってくれただけで充分だ。

「いえ、ここで大丈夫です。その辺の路肩に停めてください」

「行けるとこまで行くよ。ついでだし」

「でも私のマンションの場所って、ちょっと説明しにくくて。なので、本当にここで大丈夫です。ありがとうございます」

私が秋川主任に頭を下げると、主任は路肩に車を寄せて停車させた。

「遠いところまで送ってください、ありがとうございます。では今日はお疲れ様でした」

私が車から降りると、すぐに助手席の窓が開いた。

「お疲れ様。ゆっくり休んで」

「はい。あの、ちゃんと夕飯は栄養のあるものを食べてくださいね」

余計なお世話かもしれないけど、言わずにはいられなかった。

すると運転席から私を見ていた秋川主任が、その綺麗な顔を綻ばせ「ははっ」と声を出して笑った。

「心配してくれてどうもありがとう。じゃあ、夕飯は久しぶりに精の付くものでも食べるかな」

「ぜひ、そうしてください!」

「はは。それじゃ」

秋川主任は私に向かって左手を上げ、流れるようなハンドルさばきで道路に出ると、二、三回ハザードランプを点滅させて会社に戻って行った。

「お疲れ様でした……」

誰に聞かせるわけでもなくぼそっと独り呟いた私は、秋川主任の車が見えなくなるまで見送った後、自分のマンションに向かつて歩き出す。

確かに、今日は慣れないことの連続でとても疲れた。でも、私は別のことが気になりすぎて、疲れがあまり気にならない。

——秋川主任のお顔が……頭から離れません……

それに、秋川主任と二人きりになってから、ずっと胸がぎゅつと掴まれたように苦しい。

——はっ、もしかして……病気!?

初めて感じる不調に、自分なりの結論を出した私は、マンションの部屋に着くなり、急いでいつもお世話になっているクリニックに電話をかけたのだった。

展示会に参加した週の土曜日。

私は普段お世話になっているクリニックを受診し、帰路に就いていた。

——特に異常なしって言われてしまった……

経験したことのない胸の痛みに、締め付け。絶対、病気に違いないと思ったのだが、クリニックで検査してもらった結果は、どこも異常なし。念のため行った血液検査も、まるつきり問題なしの健康体だと太鼓判を押されてしまった。

——心電図も異常なし……じゃあ、この前の胸の痛みは、一体なんだったというの……? ?

悩みながら歩いていた私は、近くにあった書店にふらりと足を踏み入れる。

——いつも買っている雑誌がもう発売しているはず……

これまでは、昔からお世話になっているブランドで服を揃えていた。でも今は、会社に着ていく服は雑誌を参考にして購入するようにしている。

新刊コーナーにある雑誌を手にとった後、他の雑誌をチェックしつつ店内をうろろしていた私は、ふと足を止めた。少女漫画の帯に書かれた一文に、目が釘付けになる。

【……恋する気持ちに胸がキュンとなる……】

——胸がキュン……キュン? それって……

今まで経験したことのない、あの胸の締め付けは、キュン、という感覚に似ている。

——え、恋……? 私が?

誰に、という疑問に対しては、一人しか思い浮かばない……秋川主任だ。

主任に恋をしている。そう考えれば、私の胸の苦しさに説明がつく。だけど……

——これ、本当に恋なのかな……

単に、これまで周囲に男性がいなかったから、初めて接した家族以外の男性に戸惑っているだけな気も……

まったく恋愛経験のない私には、この感情が恋であると、すぐに判断することができない。とりあえず雑誌の会計を済ませた私は、結論を出すことなくマンションへ帰ったのだった。

休み明けに出勤すると、部署の先輩社員に飲み会に誘われた。

「新行内さんがこの部署に来てからまだ一度もしてないでしょ？ 新任のお祝いと親睦しんぼくを図るために今度の金曜にでもやろうと思っただけど、都合はどうかな」

私に声をかけてくれたのは、畑野香月はたの かづきさんという五年先輩の女性社員。

外見は肩ぐらいまでのポブヘアで、笑うと垂れる目がとってもキュートな女性だ。彼女も私と同じ営業事務の仕事をしている。だけど畑野さんは、一人で数人の営業社員の補佐をこなしている、ものすごく仕事ができる方なのだ。

「ありがとうございます。ぜひ参加させていただきます」

——私のために歓迎会を開いてくださるなんて……!!

「そう？ よかった。じゃあ、またお店とか詳しいことが決まったら連絡するわね」

「はい、よろしくお願いします」

「で、秋川主任と一緒にお仕事してみよう？ 慣れてきた？」

気を許していたところに、いきなり秋川さんの名前が出てきたので、ドキッとする。

「あつ、その……はい。お陰様で……」

動揺しているのを悟られないよう、必死に笑顔を保つ。ちなみに本日、秋川主任は日帰りの出張で不在である。

「秋川主任、優しいよね。新行内さんが来る少し前まで、私が主任の補佐をやってたんだけど、いやな思いしたこと一度もなかったわ」

「そうなんですネ」

「でも、私の仕事が増えすぎちゃって、どうにも手が回らなくなっちゃったの。そしたら秋川主任が、自分の補佐はいって言って言ってくれて。それに新人社員の指導も自分がするからいいよって……ほんといい人なの、秋川主任。しかもあの外見でしょう？ そりゃあ女が放っておかないわ……」

「……放っておかれてない、んですか……？」

畑野さんの言ったことが気になり、無意識に聞き返していた。

「うん、私達が見ていないような場所で、結構、告白されたりしてるみたい。何人か、見たって言ったし」

「そう、なんですネ……」

「……新行内さんも気になるの？」

ぼんやりしている私の顔を、畑野さんが腰に手を当てる覗き込んでくる。

「えっ？ あ、いえ……そういうわけではないんですけど」

「ふふ。ライバルはいっぱいいるわよ。部署内にも部署外にも」

「ち、違いますって、本当に！」

一生懸命手を振って否定するけど、畑野さんはニヤニヤと意味ありげに笑っている。

「はは。でも新行内さん、若くて可愛いからモテそうね。彼氏はいないの？」

「はい」

すぐに返事をしたら、畑野さんがガクツとする。

「即答ね。本当に？」

「はい。これまで周囲に、あまり男性がいない環境で育ってきたもので……」

「あー、そっか。女子大出身だったもんね。付属から？」

「はい」

これにもまたすぐ返事をしたら、何故か今度は畑野さんの顔が神妙になる。

「あの女子大に付属から……もしかして新行内さんって、すごいお嬢様だったりする……？」

「そんなことはありません。ごく普通の家です」

畑野さんの疑問をさらつとかわすと、そっか、とそれ以上家の話にはならず済んだ。

「でも、新行内さん、雰囲気がなんかお嬢様っぽいよね。なんていうか、立ち居振る舞いとかに品があるし、言葉遣いも丁寧だし。よく言われたりしない？」

「い、いえ……あんまり自分では意識していないのですが……」

物物ついた頃からずつとこのスタイルなので、お嬢様らしいと言われても、自分ではさっぱり分からない。

「そういうところがいいんじゃない？ 自然体で。あ、あと飲み会には秋川主任も来るわよ。……」

私は個人的に新行内さんを応援するから、頑張つて！」

「へ？ が、頑張るって、何を……」

くすくす笑いながら、畑野さんが私の背中をポンツと叩く。その意図がよく分からなくてしどろもどろになっていると、また連絡するねと言って畑野さんが私から離れていった。

——ど、どういう意味だろう？ 今のは……

彼女に言われたことが気になり、私は席に着いたまま、しばらく頭を悩ませることになった。

歓迎会兼懇親会までの日々を淡々と過ごし、迎えた金曜日。

終業時刻までに今日の仕事を片付けた私は、いち早く畑野さんと一緒に飲み会のお店へ向かうことになった。

「そういえば、一応参加になってた秋川主任、まだ外出先から戻って来てなかったけど、新行内さん、何か聞いている？」

「あ、はい。お得意様のところに行く用事があるそうで、その後、直接お店に向かうと聞いてます」

「そっか、了解。秋川主任が飲み会に来るとすごいわよ。普段抑えてる女子達が、ここぞとばかりに主任の周りに集まるから」

「そ、そうなんですか？」

「うん。それにね……お酒飲んでる時の主任って、なんとというかエロいのよね。普段きっちり閉

めてるシャツのボタンとか開けちゃって、グラスを持つ仕草がなんとも言えず色っぽいって、私は思ってる。勝手に」

会社のエントランスを出ながらウツトリする畑野さんに、思わず目が釘付けになる。それともしかして、畑野さんも秋川主任のことが好きなのだろうか？

「あの、畑野さんも……秋川主任のこと……？」

恐る恐る尋ねると、一瞬ぼかんとした畑野さんが、何故か可笑しそうに噴き出した。

「違う違う！ 私にそういう感情はまったくくないの。長年付き合ってる人もいるしね。私にとつての秋川主任は、ある意味目の保養っていうか。だって、あんなイケメン、身近にそうそういないじゃない？ 存在が貴重なのよー」

けらけらと屈託なく笑う畑野さんにつられ、私も自然と笑みが浮かぶ。

「そうですね、確かに……秋川主任のお顔は、すごく綺麗ですよ。最初見た時、びっくりしました。これが世に言うイケメンなんだって……」

「周りに男性がいない環境で育ったなら、確かにあの顔は衝撃的よね。リアル王子様だもん」

「リアル王子様……」

畑野さんの言ったことを噛みしめつつ、私は頭の中に秋川主任の姿を思い浮かべた。

私も子供の頃からよく童話やおとぎ話を読んできたので、王子様には馴染み深い。秋川主任が、王子様のコスチュームで白馬に跨またかっているところを想像してみても、まったく違和感がない。

——すごい、似合ってる……！

「新行内さん？ おーい」

ぼーっとしていたら、畑野さんに声をかけられハツとする。

「はい、すみません！」

「今夜の飲み会のお店はここです」

畑野さんがそう言って立ち止まったのは、会社の目と鼻の先にある和風居酒屋だった。シンプルなお白い壁に、店の名前が黒い文字で書かれている。木製の引き戸をカラカラと開けると、調理場を囲むカウンターが見えた。

「予約した畑野です」

「畑野様ですね。お待ちしておりました、どうぞお座敷へ」

通されたお座敷は、営業部の社員全員が余裕で入れる広さ。テーブルにカセットコンロがセットイングされているところを見ると、お鍋だろうか？

「畑野さん、今日はお鍋ですか？」

「鍋っていうか、湯豆腐ね」

「あ、なるほど」

話をしながら、畑野さんと横並びでテーブルの真ん中に腰を下ろし、みんなが揃うのを待つ。

十分経過した辺りから徐々に人が集まってくる。更に十分経った頃、全員揃うにはまだかかりそうということで、先に始めることになった。

みんなが好き好きに飲み物を注文していると、秋川主任が座敷に入ってくる。